



有機栽培のジャガイモを手にする斉藤さん。冷蔵施設で保管し、通年出荷している

十勝で有機JAS認証を受ける農家26戸全体が加入する、いわゆる団体や協議会のような組織はない。ただ、生産者が集まって2005年に立ち上げた「十勝有機ネットワーク」には、13の農場（有機JAS認証のない農場も含む）が加入している。

同ネットワークの生産者は、生産する農作物も農法も異なる。会長を務める斉藤正志さん（63）＝帯広市桜木町＝の畑では、23%のうち3.5%が有機栽培で、08年に有機JAS認証を取得。有機で小麦、ジャガイモ、トウモロコシ、大豆などを作っている。

斉藤さんは「有機で（資材の）投入を減らして作れることが分かり、（農薬や化学肥料を使う）慣行栽培にも生かしている」と話す。「畑全部は無理でも、一部なら有機を続けられる」と、3.5%で得たノウハウを生かし、減農薬や化学肥料の低減など全体の経営を改善している。

リン酸の投入畑に過剰気味

近年、多くを輸入に頼る化学肥料が、中国、米国など原産国での資源枯渇や需要増で値上がりし、農家経営を圧迫している。道総研十勝農業試験場（芽室町）のデータでも、十勝の畑は小麦、ビートなどでリン酸の投入が過剰気味だ。

帯広畜産大学の谷昌幸准教授は「十勝の畑はリン酸を作物が吸収しづらいため、大量に投入してきた経緯があり、現在も多めに投入する傾向がある」とし、「有機栽培では作物がリン酸を吸収できる方法が見つかるかもしれない。挑戦することは大事」と話す。

斉藤さんの畑では、経営面だけでなく、品質面でも有機栽培を取り入れた効果が出ているという。慣行で栽培する種用ナガイモも「堆肥など有機資材をうまく入れることで、植えた後の育ちがいい」（斉藤さん）という。

収量遜色なく等級は最上級

去年は、収穫期の長雨で収量や品質が低下した秋まき小麦のパン・中華麺用新品種「ゆめちから」の有機栽培で、10%当たりの収量（反収）で慣行と遜色ない10俵を確保し、等級も最も高い1等Aだった。1等Aの場合、国の補助金も増えて経営面でもプラスに。有機は慣行より、価格も高値となる利点もある。

斉藤さんは「慣行栽培が安全でないわけではない」と強調した上で、「アレルギーや化学物質過敏症の人など有機を求める層はいる。安全・安心にもこだわりたい」と話す。

同ネットワークは昨年9月、斉藤さんの農場で、初の試みとして消費者との交流イベントを開いた。約120人の消費者が生産者の説明を聞きながら、有機農産物の料理を楽しんだ。斉藤さんは「ネットワークで仲間も増えてきた。これからも食育活動などに取り組み、子供を持つ若い世代などと交流していきたい」と意気込む。

<リン酸>

肥料の三大要素（NPK）である窒素（N）、リン酸（P）、カリウム（K）の1つ。鉱石から採取される。十勝に多い火山性土では、他の土壌に比べて多いアルミニウムがリン酸と結合してしまうため、作物の吸収利用が難しくなる。